

主日礼拝

2026年8月23日 10時20分～

「地の果てにまで」

司式：

奏楽：

《神の招き》

前 奏 『ポコ・レント』C. フランク
招 詞 イザヤ書40章28節
賛 美 歌 156

《神の言葉》

祈 禱 聖霊の照らしを求める祈り
聖 書 イザヤ書5章1～7節 (旧約1052頁)
使徒言行録13章44～52節 (新約 235頁)

子ども説教
交読詩編 40編1～12節 (48頁)
賛 美 歌 418
説 教 「地の果てにまで」 八木浩史牧師
祈 禱
賛 美 歌 413

《感謝の応答》

信 仰 告 白 使徒信条
献 金
祈 禱 献金当番
主 の 祈 り (週報表紙、ホームページ掲載)

《派 遣》

頌 栄 27
祝 福
報 告
後 奏 『クワジ・アレグロ』C. フランク

礼拝当番： (役員：) 献金当番：
音響： 映像：

『イザヤ書』は、神とイスラエルの関係を「ぶどう畑」にたとえて語る預言の箇所です。ぶどう畑の主人である神は、肥沃な土地を選んで耕し、良いぶどうを植え、見張りのやぐら等を建てるなど、十分な手入れをしました。このぶどう畑はイスラエルを指し、神がイスラエルを選び、守り、導いてこられた恵みを表しています。しかし良いぶどうではなく「酸っぱいぶどう」が実っていました。

「主は公正を待ち望んだのに、そこには流血。正義を待ち望んだのに、そこには、叫び」と嘆かれます。当時のユダ王国では、富裕者が土地を買い集め、貧しい人々から土地を奪うなど、神の恵みを独占していました。神はご自分の恵みを受けた民に、礼拝だけでなく、公正と正義を実践し、恵みを分かち合うことを求められます。

『使徒言行録』は、ピシディア州のアンティオキアにおけるパウロとバルナバによる宣教の様子を記す箇所であり、宣教がユダヤ人だけでなく異邦人へと広がっていく転換点となります。ユダヤ人だけでなく異邦人も含めた町中の人々が主の言葉を聞くために集まりました。しかしユダヤ人たちは異邦人にも福音が告げられることを妬み、パウロの語る福音に反対します。そこでパウロとバルナバは「私たちは異邦人の方へと向かいます」と告げます。それは「私はあなたを異邦人の光とし、地の果てにまでも救いをもたらす者とする」(イザヤ書49:6)とあるとおり、神のご計画なのです。異邦人たちはこれを聞いて喜び、福音を受け入れました。福音はユダヤ人に独占されるものではなく、神の救いを「地の果てにまで」届けるためのものです。弟子たちは迫害を受けても喜びと聖霊に満たされて、福音をさらに広く宣べ伝えて行きました。